

人文・社会系学部における初年次教育の試み
～アカデミック・アドバイザー制度を中心に～

The Academic Advisor System in the Department of Contemporary Society:
The Experience with First-Year Students

大谷 孝行 OTANI Takayuki

はじめに

近年日本の大学において「初年次教育」が注目され、学会を通じて体験交流も盛んになってきている。平成 20 年度に富山国際大学は現代社会学部を発足させ新たなスタートを切ると同時に、アカデミック・アドバイザー制度（助言教員制度）を新たに導入するなど、初年次教育に対しても力を入れた取組みを行っている。

本稿では、筆者の勤務する大学における初年次教育の取組みの現状と問題点を、特にアカデミック・アドバイザー制度に即して紹介したい。

1. なぜ「初年次教育」か

これまでの日本の大学の特色は、学生に対する「溺れたくなければ泳げ」という言葉に象徴されるように、学生が自主的に大学生活に適応するのに任せてきた感があった。学生の自主的な姿勢を期待し、そうした姿勢をとれない学生はそのまま放任してドロップアウトしていくのに任せるという傾向があった。しかし、大学全入時代を迎えている今日、学生のなかには大学生活に適応できない者が増加しており、大学が個々の学生に対して、より具体的に「泳ぎ方を示す」必要が生じている。

初年次教育が日本で推進されるようになった背景には、いわゆるユニバーサル時代を迎え、えり好みさえしなければ、大学を希望する者が皆入学できるという全入時代に入ったことがある。以前ならば入試による振り分けによって入学者の学力は一定の質が保証されていたが、少子化と大学学部の増設により、大学側からすれば、入学定員を確保するために入試によって厳しく入学者を選抜することが難しくなっているという状況がある。

こうして入学した学生のうち、基礎学力に問題のある学生は大学の授業についていくことができず、そのままドロップアウトしてしまう可能性が高いため、勉学面における適応という点で初年次に特別な配慮が必要とされるようになった。また大学生活一般への適応という点でも、高校までと大学では様々な違いがあるので、高校から大学への移行に関して大学が配慮しなければならない点が生じてきた。学生の意欲向上という点に関して、学生の得意・不得意、強み・弱みなどの情報を教員が把握するとともに、生活習慣などの把握を通じた生活指導的な要素も必要になってきており、教育の質的転換を図るという意識を教員が持たなければならなくなっている。

富山国際大学現代社会学部において、アカデミック・アドバイザー制度が導入された経緯は、学習面、生活面における学生の大学への適応支援を、アドバイザーが鍵となる役割を果たしなが

ら行うことによって、学生の大学生活への円滑な移行を可能にし、学生が意欲的で有意義な大学生活を送れるように支援する点にあったのである。

2. アカデミック・アドバイザー制度

富山国際大学現代社会学部では、初年次教育の鍵を担うスタッフとしてアカデミック・アドバイザー（以下、場合によってアドバイザーと略記）が存在している。平成20年度からアカデミック・アドバイザー制度を立ち上げ、大学が学生を放任してしまうのではなく、アドバイザーが適時に要所所で学生に対する指導やアドバイスを行っている。

指導体制としては、平成20年度は主として専門課程に所属していない教養科目担当の12名の教員がアカデミック・アドバイザーを務めるかたちでスタートした。一人の教員が11名前後の1年生対象の教養演習（週1コマ必修）を担当し、この時間に生活面や学習面で様々な指導を行った。平成21年度は教養科目担当の11名の教員が1年生及び2年生のアカデミック・アドバイザーを担当し、さらに平成22年度は専攻から3名の教員が加わり11名の教員で教養演習Ⅰ・Ⅱを担当している。22年度は、1年生を担当するアドバイザーが9名、2年生を担当するアドバイザーが8名で、1ゼミあたりの学生数は約15人であった。中国人留学生については、1年生全員を中国語担当の教員で担当し、2年生は一部の留学生を同教員で引き続き担当し、残りの留学生は中国語以外のアドバイザーに振り分けている。

アドバイザーの主な役割は、学生全員に配布される「学生便覧」にも明記されており、以下に「学生便覧」からの援用によってアドバイザー制度を紹介したい。

1. アカデミック・アドバイザー制の目的

学生が有意義な大学生活を送れるように、学生が直面する様々な問題について、アカデミック・アドバイザーが相談にのりながら、適宜指導やアドバイスを行ないます。

2. アカデミック・アドバイザー制の形態

(1) 教養演習Ⅰ・Ⅱの担当者が原則としてゼミ生のアドバイザーを務めます。なお学生の配属は事前に大学側で決定します。

(2) 学生は予め割り振られたアドバイザーにつき、1年単位でアドバイザーは変更します。なお2年目はゼミに所属する学生の顔ぶれを変えて割振ります。

3. 教養演習Ⅰ・Ⅱの学習内容

使用テキストなどはアドバイザーの自由裁量で選びますが、以下の点はアドバイザー全教員が一致して学生の指導にあたります。

(1) 文章作成能力や思考力を育てます。読み、書き、話し、聞くといった基礎的なコミュニケーション能力や行動する能力を伸ばします。

(2) 講義の受け方、ノートのとり方、レポートや発表のレジュメの作成法と作成にあたって必要な情報収集の方法、ゼミでのプレゼンテーションの仕方を指導します。

(3) 発表の際にインターネットのホームページを借用する場合など、できるだけ原典にあたる習慣をつけるよう指導し、図書館利用の方法を教示します。また引用する場合

は出所を明示するなど著作権を守ることを指導します。

- (4) 新聞記事をできるだけ教材として活用し、学生が新聞を読む習慣がつくように工夫し、社会への積極的関心を喚起します。

4. アカデミック・アドバイザーの具体的役割

アドバイザーは、授業の履修、授業料の免除、奨学金の受け方、海外留学・国内留学、休学・退学、交通事故、対人関係の問題、保護者（保証人）との連絡など、学生が大学生生活を送るにあたって直面する問題全般の相談あるいは指導を行います。

大学生活では学生が自分で生活を管理する部分が大きくなりますので、規則的な生活習慣という点に意を払いながらアドバイザーは担当学生の指導に当たります。

(1) 勉学・学習習慣に関する指導

- (1) 学期始めの履修指導。アドバイザーは時間割の組み立て方の相談にのり、履修する講義の内容、評価方法なども事前に学生に確認させます。
- (2) ゼミ以外の授業の出欠状況をアドバイザーが把握します。アドバイザーは講義担当教員からの情報を得ながら、担当学生に適宜助言をします。
- (3) アドバイザーは学生の興味・関心を把握したうえで、学生自身が大学生活における具体的な目標を設定できるよう支援します。例えば各種検定試験の受験など資格取得などを勧めます。
- (4) アドバイザーは場合により、担当学生とメールや携帯電話などの手段で連絡をとることがあります。それでも連絡がつかない場合、学生の自宅に電話をかけて連絡をとることもあります。またアドバイザーの側から学生の保護者に連絡し相談の機会を設定することがあります。
- (5) 学期初めに学生に対して自己分析アンケートを実施し、大学で学びたいこと、将来の目標、大学生活で不安に感じていることをアドバイザーは把握します。

(2) 勉学以外の大学生活全般に関する指導

- (1) アドバイザーは教養演習の時間に、ゼミの学習だけを行うのではなく、担当学生の大学生活全般、例えば一週間の大学生活や他の授業の様子などの情報交換を適宜行います。
- (2) アドバイザーはボランティア、クラブ・サークル、留学、夢への架け橋等、学生が参加できる活動に関する情報提供を行ないます。
- (3) クラブやサークルに所属している学生に関しては、練習に費やされている時間など、生活習慣の実態をアドバイザーは把握します。
- (4) アドバイザーは学生に対する有効なアドバイスができる本学の教員を随時学生に紹介します。また場合により、アドバイザーはカウンセリング室や健康管理センターとも連携を図りながら学生を指導します。
- (5) 大学生としての良識と品位をもちマナーを守ることの大切さをアドバイザーは伝えます。自家用車利用についても交通規則を遵守することや、任意損害保険の契約などについて助言します。

以上のように、アドバイザーが果たす役割は、学生が学生生活を送る上で直面する事柄全般にわたっており、その意味でアドバイザーは学生にとっての、いわばよろず相談役のような位置を占めている。

アドバイザーは教養演習のゼミを担当する以外にも、ゼミ生との個人面談を定期的実施して、学生が抱えている問題の相談にのったり、目標設定のアドバイスをしたりしている。制度導入初年度の平成 20 年度には Semester あたり 3 回前後、担当学生と個人面談を実施し、平成 22 年度は年間 4 回の個人面談をアドバイザーが実施している。面談の時期は、年度当初の履修登録、前期の学期末試験前、後期の履修登録、後期の学期末試験前である。

アドバイザーが面談や授業を通じて得た情報は「学生情報ファイル」としてフロッピーに入力され、学務課が個人情報に配慮しながら管理し、教職員は学生指導のために随時参照できる体制をとっている。学生情報ファイルは、次の項目に沿って記入がされている。(1) 今期の課題・目標・特に力を入れて取り組むこと、(2) (アドバイザーが) 特に力を入れて指導した点・留意した点、(3) 今後の課題・指導すべき点、(4) その他、学習態度・生活態度等、(5) アルバイトの実施状況。

学習の動機づけという点に関して言えば、大学には自分のキャリア形成という点を明確に意識して入学してくる学生（例えば医者になりたいから医学部、教員になることを目指して教育学部に入学するという学生）ばかりいるわけではないので、自分のキャリア形成の中で大学に通う目的を必ずしも明確に意識できていない学生に対してどのように学習の動機づけを行うかが問われる。勉学上のノウハウやスキルの問題とともに、そもそもなぜ大学で学ばねばならないのかという学びの意味をも学生には伝えていく必要がある。勉学意欲の低い学生に対しては、「なぜこれを学ぶのか」に関して抽象的ではない具体的な動機づけが必要となる。その際には、個々の学生に見合った目標設定や動機づけも必要となるので、アドバイザーや他の教職員が個々の学生といかに向き合い、学生の自己決定を支援できるかがポイントとなる。

しかしながら一人の学生を一人の教員だけで指導できるものでは決してない。学生の指導にあたっては教員が情報共有を図る必要があり、月に 1 回開催されるアカデミック・アドバイザー連絡協議会において、アドバイザーは担当する学生の問題を話し合い体験交流を図っている。

当協議会で議論された主な具体的議題は以下のとおりである。(1) オリエンテーションでの AA の役割、(2) 履修指導、(3) 学生情報ファイル、(4) ゼミ生の様子・ゼミの現状、(5) ゼミの体験交流、(6) オープンキャンパスでの模擬授業担当者、(7) 保護者懇談会を前に、(8) 個人面談、(9) 英語補習授業、(10) 新聞連携講座、(11) ゼミの授業内容を文書で配布、(12) 学生のアルバイトの実態把握、(13) 新聞連携講座、(14) 入学予定学生の情報の手前入手、(15) 教養演習アンケート、(16) 2 年生の進級、(17) 英語診断テスト、(18) 長期欠席者への春休み中の対応、(19) 文章講座（2 年生対象）。

連絡協議会は、各アドバイザーが担当学生の状況を忌憚なく報告し合って情報交換できる場になっており、学生の指導においてアドバイザーが孤立してしまうことを防ぐ役割も果たしている。

3. 初年次教育の内容

2 「アカデミック・アドバイザー制度」で述べたように、アドバイザーは、1 年生（及び 2 年

生)の学習面・生活面での相談と指導にあたり、学期開始時の履修指導や各種連絡(学務的な事柄やスポーツ大会への参加呼びかけなど)をはじめとして、ノートの取り方やレポートの書き方などアカデミックスキルを中心とした指導を行っている。

現代社会学部は、観光、環境デザイン、経営情報という3つの専攻より成る人文社会系あるいは文理融合の学部である。純粋な理工系学部ではないために、積み上げや系統性、体系性という点では理工系学部と異なる面があるが、高等教育を受ける際にも「読み・書き・話し・聞く」といった言語能力は当然基底的部分をなすという観点から、アドバイザーは教養演習においてゼミ生の言語能力やコミュニケーション能力の涵養に努めている。

以下に平成21年度、22年度に各アドバイザーが行った教養演習の内容を列記してみよう。

(1)自己紹介、(2)1年間のMUSTとWANT、(3)「私のこだわりの1曲」の紹介、(4)新聞一面記事の勉強、(5)SPIの国語問題、(6)読書要約・感想発表、(7)「大学生活に対する抱負」を基本テーマとしたレポート作成・プレゼンテーション、(8)図書館の利用方法、(9)大学の講義とは、アカデミックスキルとは、(10)レポートの書き方、注意点(引用等)、(11)WORDの使い方、(12)学生生活を送るに当たって大切なルールとマナー、(13)建学の精神・大学の基本理念の確認と徹底、(14)「チームワークゲーム」を通してチームワークについて振り返り・意見交換、(15)社説の書写、(16)学内PC利用法、(17)e-ポートフォリオ、(18)ディベート、(19)ビデオを見て意見交換し、レポートを書く、(20)毎回、社会の出来事で発見したことの発表(全員)とコメント、(21)自分が選んだ新書本について発表、(22)アドバイザーが指定したテキストを読みあらすじをつかみ、レジュメにまとめる、(23)夏休み中に1・2年ゼミの希望者で刑務所見学に行く、(24)学期を振り返る、等。

現在のところアドバイザー全員が同一テキストを同一のペース、スケジュールで実施するという方法をとっていないため、教養演習の内容は各教員の自由裁量に委ねられている面が大きい。ただし大学の講義の聴き方、ノートの取り方などを学生に伝えるには何らかの参考資料も必要のため、市販のテキストを補助教材としてアドバイザー全員が使用している。

したがって上に挙げられている教養演習の内容項目は、アドバイザー全員が全て実施したというものではないが、2の「3. 教養演習Ⅰ・Ⅱの学習内容」で述べた点に関しては、全てのアドバイザーが共通に取り組むことを目標にしている。

各ゼミ単位で行われた授業の他には、合同教養演習として1年生全員が一堂に会し、留学生や留学体験のある日本人学生による「体験談」を年に1度聞く機会も設けている。

また新聞に親しむことを目的として、地元紙との連携講座を実施している。平成21年度には同新聞社編集局の部長クラス4名を講師に迎え、「新聞の役割と使命」、「民主党政権で地方はどう変わるか」、「裁判員制度始まる」等のテーマで1年生全員を対象にした2回にわたる講演を実施した。平成22年度は、NIE担当部長にゼミごとに「新聞の読み方」「なぜ今新聞か」というテーマで話をしてもらい、その後に学生に「今、打ち込んでいること」、「大学でどうしてもやりたいこと」、「富山の魅力」などのテーマから選んで作文を書いてもらい、その場で同部長に添削してもらった。学生の書いた作文の中には、同紙ヤングコーナーに投稿として掲載されたものも何本もあり、学生にとっての励みとなった。

4. 学内他部署との連携

学生の教育や指導が有効に機能するために大切なのが、教職員間や各部署の間での連携である。一人の学生に関する情報を、教職員が広く共有していることが、きめ細かい指導につながる。

例えば、アドバイザーは他の講義科目担当者とも連携しながら、担当学生の出席状況を把握している。具体的には講義への欠席回数が頻繁になったところで、講義科目担当者がアドバイザーに連絡を入れることにしており、アドバイザーは大学の講義には出席すべしという意識づけを学生に与えるとともに、授業中の姿勢をもアドバイスしている。

高校から大学への移行という点に関しては、入学前指導の実施とオリエンテーションキャンプの実施があり、入学前指導の達成状況はアドバイザーに伝えられ、入学後のゼミ生指導に利用されている。

入学前指導は、推薦入試と A0 入試によって入学する生徒を対象に実施されており、入学予定者に対する入学前事前学習会と入学前指導とによって構成されている。大学生活への移行を円滑に行えるように、特に基礎学力のアップに重点を置いて、課題の学習方法を解説するとともに、課題を通じた指導を実施している。入試係が事務局となり、作問担当や添削担当を決定している。

平成 20 年度は英語、社会問題に関して出題形式の課題を生徒に与えた。課題の分量は全 3 回で、各回につき英語 10 時間分、社会問題 10 時間分の問題であった。これは 1 日 1 教科あたり 1 時間ずつ、10 日分を 1 回分の分量として設定されたもので、英語では計 30 時間、社会問題では計 30 時間の課題が、アドバイザーを含む本学教員によって作成された。平成 21 年度入学者からは科目として国語も加わり、各回につき英語 10 時間分、社会問題 5 時間分、国語 5 時間分の課題となり、平成 22 年度入学者に対しても同様の実施形態をとった。

入学予定者には第 1 回目の課題をしてもらう前に大学まで足を運んでもらい、入学前課題学習会を実施し、課題学習の仕方を指導するとともに第 1 回の課題を手渡している。第 2 回目、3 回目の課題送付時には前回分の添削答案も送付している。

課題の評価については、アドバイザーを含む本学教員が添削を担当し、概評とコメントを書いた一覧表を入試係に提出する。概評の基準は A よい、B まあまあ、C 努力を要する（まちがいが多い、空欄が多い等）とし、C については添削担当者が簡単なコメントを書くこととしている。

この概評とコメントが、当該生徒を担当するアドバイザーに伝えられることによって、アドバイザーは担当ゼミ生の課題に取り組む姿勢や勉強習慣を把握する材料としている。

オリエンテーションキャンプは平成 20 年度より、立山少年自然の家で 1 泊 2 日の合宿形式で 4 月上旬に実施されている。学務課主催のもと、新入生全員と教員全員が参加し、皆が同じ釜の飯を食うことで、学生の友人づくりや学生と教員の距離を縮めるのに効果をあげている。

オリエンテーションの内容は以下のとおりである。学部の概要説明、アドバイザー制度の紹介、履修ガイダンス（科目履修、単位制度、成績評価、 Semester 制、卒業要件など）、専攻別ガイダンス、大学諸機関（キャリア支援センター、情報センター、国際交流センター、図書館利用）の説明。合宿 1 日目の夜には交流会（全体ゲーム、ゼミ別交流、専攻別交流）が実施されている。2 日目のスケジュールは以下のとおりである。学務課ガイダンス（履修登録方法、提出書類、諸証明書発行、教科書販売など）、これまでの説明事項を新入生が理解できているかのチェックタイ

ム(確認シート)、ゼミタイムの中でゼミ生からの質問と履修等のアドバイス。2日目の最後には野外炊飯を実施し、終了後バスで大学へ移動した後、大学到着後に解散という流れである。

合宿終了の翌日に大学でもう1日のオリエンテーションが行われている。内容は交通安全教育、クラブ交流会、クラブ紹介、留学生オリエンテーションである。

他に学務課との連絡体制としては、学務課長がアドバイザー連絡協議会に出席して審議内容を把握している。学務課は学務全般に関するアドバイザーとの連携は言うに及ばず、「学生情報ファイル」の管理、合同教養演習や新聞連携講座の実施に際しての補助にあたっている。またアドバイザーがゼミの学生や保護者と連絡をとって、保護者を交えた面談を実施する場合もあるが、その際には学務課のスタッフが協力する体制をとっている。

毎月約1回実施されているアカデミック・アドバイザー連絡協議会の議事内容は、教授会での報告を通じて、学部の全教員が情報を共有できるように図られている。

キャリア支援センターとの連携としては、1年生対象の必修授業「キャリアデザイン講座」との連携がある。当該授業では毎回学生が与えられたテーマについての作文を書き、授業担当者からはコメント入りで作文が学生に返却される。その作文のコピーが、当該学生のアドバイザーにも渡され、アドバイザーのゼミ生指導に役立てられている。なお平成22年度の主な作文テーマは以下のとおりである。「大学生活で伸ばしたい自分の力」、「なぜ働くのか」、「言語力を鍛えるには」、「自分が大切にしたい生き方」、「大学生活で守りたいマナー・ルール」、「自分を支えてくれた人たち」、「社会・会社で働くとはどういうことか」。

5. 問題点と今後の課題

アカデミック・アドバイザー制度は1年生及び2年生を対象とした制度であり、年度末には学生に対するアンケートを実施している。平成21年度のアンケートの質問事項は以下のとおりであり、学生には「5 そう思う」、「4 まあそう思う」、「3 どちらでもない」、「2 あまりそう思わない」、「1 そう思わない」という5段階評価で回答してもらった。ただし以下の集計結果は1、2年合同のものなので、今後は学年別の集計にする予定である。

教養演習及びアカデミック・アドバイザー制度についてお聞きします。

以下の質問について、5段階のうちどれかでお答えください。

1. 学習面

- (1) 読み、書き、話し、聞く能力は伸びたと思いますか。
- (2) (1)で5か4と答えた人にお聞きします。伸びたとすれば、特にどの能力ですか。
- (3) ノートの取り方について学習できましたか。
- (4) レポートや要旨の書き方について学習できましたか。
- (5) 文献やホームページからの引用の仕方を学習できましたか。
- (6) 発表(プレゼンテーション)の方法について学習できましたか。
- (7) 図書館利用の方法を学びましたか。
- (8) 新聞を読む回数は増えましたか。

2. その他

(9) 学期始めの履修相談は十分でしたか。

(10) 他の授業に関する出欠に関するアドバイスがされましたか (必要学生のみ)。

(11) 具体的な目標の設定の相談ができましたか。

(12) アドバイザーには相談しやすい雰囲気でしたか。

(1) 「読み、書き、話し、聞く能力は伸びたと思いますか」という質問に対しては、「5 そう思う」21%、「4 まあそう思う」45%、「3 どちらでもない」27%、「2 あまりそう思わない」6%、「1 そう思わない」1%。「どちらでもない」と「(あまり) そう思わない」とを合わせた学生が3分の1近くいたことに今後の課題が表れている。

(2) 「(1)で5か4と答えた人にお聞きします。伸びたとすれば、特にどの能力ですか、書いてください。」という質問に対しては、「読む」20%、「書く」25%、「話す」33%、「聞く」23%。話す能力が伸びたと感じている学生の数が多いのは、少人数というゼミの特性を反映しているであろう。

	5 そう思う	4 まあそう思う	3 どちらでもない	2 あまりそう思わない	1 そう思わない
Q1	35	76	45	10	2

読み、書き、話し、聞く能力は伸びたと思いますか (n=168)

	読む	書く	話す	聞く
Q2	24	30	39	27

どの能力が伸びたと思いますか (単位：人)

QuickTime[®] C²
 èLifÉVÉçEÖÉáÉÄ
 Ç™Ç±ÇÄÉsÉNÉ'ÉÉÇ¼@ÇÈÇzÇ¼Ç...ÇÖIKóvÇ-ÇÂB

QuickTime[®] C²
 èLifÉVÉçEÖÉáÉÄ
 Ç™Ç±ÇÄÉsÉNÉ'ÉÉÇ¼@ÇÈÇzÇ¼Ç...ÇÖIKóvÇ-ÇÂB

(3) 「ノートの取り方について学習できましたか」では、「5 そう思う」20% 「4 まあそう思う」28%、「3 どちらでもない」40%、「2 あまりそう思わない」11%、「1 そう思わない」7%で、これはアドバイザーによる取り組み方の差が端的に表れたものと思われる。

(4) 「レポートや要旨の書き方について学習できましたか」に対しては、「5 そう思う」27%、「4 まあそう思う」43%、「3 どちらでもない」20%、「2 あまりそう思わない」6% 「1 そう思わない」4%。「どちらでもない」と「(あまり) そう思わない」とを合わせると3割に上っており、今後アドバイザーの間で実施の徹底が必要とされる場所である。

(5) 「文献やホームページからの引用の仕方を学習できましたか」では、「5 そう思う」26%、「4 まあそう思う」41%、「3 どちらでもない」24%、「2 あまりそう思わない」5% 「1 そ

う思わない」5%。「どちらでもない」と回答した者が4分の1近くに上っている。(5)の回答は、上記(4)の回答と関係している面があるので、(4)、(5)合わせた指導が必要となるところである。

(6)「発表(プレゼンテーション)の方法について学習できましたか」では、「5 そう思う」20%、「4 まあそう思う」49%、「3 どちらでもない」24%、「2 あまりそう思わない」5% 「1 そう思わない」3%。「どちらでもない」と回答した者が4分の1近くに上っているのが今後の課題となる。

(7)「図書館利用の方法を学びましたか」では、「5 そう思う」25%、「4 まあそう思う」36%、「3 どちらでもない」25%、「2 あまりそう思わない」9%、「1 そう思わない」5%。「どちらでもない」と「(あまり) そう思わない」を合わせると4割近くに上っており、アドバイザーの間で指導の徹底を図る必要がある。

(8)「新聞を読む回数は増えましたか」では、「5 そう思う」16%、「4 まあそう思う」33%、「3 どちらでもない」33%、「2 あまりそう思わない」10%、「1 そう思わない」8%。教養演習のゼミを通じて新聞を読むことが必ずしも習慣づけにまで至っていないことが明らかになった。学生が新聞を読む習慣形成につなげるように教養演習をいかに進めるのか、アドバイザー同士での体験交流などを図る必要があろう。

(9)「学期始めの履修相談は十分でしたか」に対しては、「5 そう思う」38% 「4 まあそう思う」49%、「3 どちらでもない」14%、「2 あまりそう思わない」1% 「1 そう思わない」2%。他の質問項目に比べて高い評価が得られている。

(10)「他の授業に関する出欠に関するアドバイスがされましたか(必要学生のみ)」では、「5 そう思う」27%、「4 まあそう思う」38%、「3 どちらでもない」26% 「2 あまりそう思わない」5% 「1 そう思わない」5%。128名の学生は、何らかのかたちでアドバイザーから出欠に関するアドバイスがなされたと回答しており、そのアドバイスを有効ととらえた学生が、「そう思う」と「まあそう思う」とを合わせて65%に及んでいる。

現代社会学部になってからは、キャップ制度の導入と相まって全体的に学生の授業への出席率は高くなっていると思われるが、その理由の一端がここにあるだろう。

(11)「具体的な目標の設定の相談ができましたか」に対しては、「5 そう思う」21%、「4 まあそう思う」37%、「3 どちらでもない」36%、「2 あまりそう思わない」4% 「1 そう思わない」2%。「どちらでもない」の回答が全体の3分の1強と高く、学生の目標設定という点では課題が残る結果になった。目標とは教員が上から学生に与えるものではないにせよ、学生が目標設定を自らするための支援をアドバイザーはする必要があるだろう。

ただし勉学意欲の向上や勉学の動機づけという目標設定に限って言えば、それらは教養演習という特定の科目や個人面談の場面のみならず、大学全体がFDとして取り組むことが前提である。この点では学生の勉学に対する関心を高めるために、全授業で実施されている授業アンケート等によって各教員が授業改善に取り組んでいるところである。

(12)「アドバイザーには相談しやすい雰囲気でしたか」では、「5 そう思う」41%、「4 まあそう思う」43%、「3 どちらでもない」11% 「2 あまりそう思わない」4%、「1 そう思わない」1%。この項目も他の質問項目に比べて高い評価が得られており、学生はアドバイザーを親しい存在と捉えていることがうかがえる。

	5 そう思う	4 まあそう思う	3 どちらでもない	2 あまりそう思わない	1 そう思わない
Q3	24	46	67	19	11
Q4	45	73	34	10	6
Q5	43	69	40	8	8
Q6	33	82	40	8	5
Q7	42	60	42	15	9
Q8	27	56	55	16	14
Q9	63	77	23	2	3
Q10	34	48	33	7	6
Q11	36	62	61	6	3
Q12	69	72	19	6	2

質問(3)～(12)に対する5段階評価回答数(単位:人)

QuickTime[®] 2
 ẽLí£ÉvÉçÉOÉâÉÄ
 Ç™Ç±ÇÃÉsÉNE`ÉÉÇ¾å©ÇÉÇžÇ½Ç...ÇÖïKónÇ-ÇÄB

年間30回の教養演習では、アドバイザー全員が同一内容の授業を実施しているわけではなく、アドバイザーの自由裁量でゼミ運営が任せられている面がある。教養演習の際には教員の個性が表れるので、学生に伝えるべきアカデミック・スキルという点では、アドバイザー間でばらつきが見られるのが現状である。教員の個性が発揮されることそれ自体は決して悪いことではないが、教養演習で扱う内容について、どのアドバイザーも最低限ここは外せないという点を確認しておくことは必要であろう。

アドバイザーが学生を支援する際には、アドバイザーと学生が共通に使用できる、学部の実情に合ったテキストがあることが望ましいので、アドバイザーの意見を集約しながら、アドバイザーが学習面や生活面で学生を支援するためのツールブックを作成し、平成23年度新入生から使用できるようにする予定である。ツールブックの内容は、アドバイザーが学習面と生活面での具体的支援を行う際の手引きにすることができ、学生の立場からは、高校までの「生徒」から、大学に入学して「学生」となったことにより、学びを主体的におこなっていくために求められるノウハウを効果的に習得するためのツールブックを作成する予定である。さらに、作成されたツールブックについては、それを有効に活用するような体験交流をアドバイザー間で重ねていく必要がある。

基本的な学習習慣の形成(授業態度も含め)について言えば、大学においては学習意欲や理解

度に差がある学生を対象に、一律に同一レベルの内容の授業を、一方的な講義形式で実施することは難しくなっている。教育効果を上げるためには、教員からの一方的な講義形式の授業だけでは限界があり、双方向的授業や学生の側に何らかの主体的作業を行わせるような、授業方法の工夫が求められている。

既に述べたように、基礎教育の目的達成を特定の科目のみに任せてしまうことは避けなければならない。例えば「読み書き話し聞く」のコミュニケーション能力やコンピュタリテラシー等は、全ての科目を通じて実践的な訓練の中で習得していくものであり、全学的な取り組みが必要である。全ての講義における教育方法の工夫、適正な成績評価などと相まって、全学的、組織的に実行していかなければ効果が上がらず、一部教員の努力だけでは功を奏さない。

大学に足を運ばない（あるいは運べない）学生への対応という点に関しては今後の課題が大きい。単に叱咤激励すれば大学に来るような学生であれば問題はさほど困難ではないが、何らかの心理的な要因で大学に足を運ばない学生の場合、アドバイザーでは手に余る問題とも言える。学内のカウンセリング室との連携を図るにしても、こうした学生はそもそもカウンセリング室にも足を運んでくれないため事態の打開が難しい。アドバイザー向けの研修として、平成20年度、21年度ともに臨床心理士を迎えて「大学教員にとってのカウンセリングマインド」、「適切な介入と見守り」と題して研修会を行ってきたが、学生本人が通学したくとも何らかの理由で通学できない場合、せめて当該学生の保護者とだけでも連絡をとりあい、当該学生の通学に途を開くような対策を模索していく必要があるだろう。

また、アドバイザーが多くの子生を対象に個人面談の時間を確保することが物理的に難しいという問題もある。教養演習の枠組みを有効に利用しながら、アドバイザーがゼミ生個々人の情報を入手していく工夫と、その情報を効率的に面談に活かす工夫が求められるところである。

さらには入学前課題の作問、添削もアドバイザーを含めた本学教員で現在までのところ対応しているが、教員の負担は決して軽くない。課題の作成や添削、分析に関しては、外部業者の力を借りることも視野に入れて検討していくべきであろう。

以上、筆者の所属する大学におけるアカデミック・アドバイザー制度に沿ってその現状と問題点を述べた。現今の学生は一昔、二昔前の大学生像とは明らかに異なり、かつての大学に比べれば、大学は手取り足取りの指導を行っている面がある。面倒見の良さがかえって学生の主体性を阻むことにならないように、適時に要所要所でアドバイスするというメリハリの利いた指導がアドバイザーには求められるところである。